2021 年 1 月 3 日 佐土原キリスト教会礼拝説教
聖書箇所：マタイ福音書 2 章 1～12 節
説教題：今からこそ求道

インターネットで「元旦の祈り」というのを見つけました。「神様。今のところなんとか頑張っています。今のところ人の噂話もせず、怒り出したりせず、欲張ったり、機嫌が悪かったりせず、意地悪だったり、わがままだったり、甘えすぎたりしていません。本当にそのことでは感謝しています。でもあと数分でボクは寝床から出ます。そうしたらそこからは沢山の助けがいると思います。宜しくお願いします。アーメン」。起きた瞬間から戦いが始まるということでしょうか。そうであれば、朝の祈りは大切だと思います。皆様は今年の目標聖句をもう決められたでしょうか。私は、祈りもそうですが、神様に少しでも近づきたいと切実に願っています。

教会暦では 1 月 6 日が「東の博士達がイエス様を礼拝した日」となっています。「クリスマス物語」に登場する「東方の博士達」ですが、彼らの記事は何を語るのでしょうか。

1.「博士達の来訪」の意味

イエス様が生まれてしばらく経った頃、東方から博士達がエルサレムにやって来て「ユダヤ人の王としてお生まれになった方はどこにおいでになりますか…東の方でその方の星を見たので、拝みにまいりました」(2)と言いました。彼らは何者なのか、なぜ「ユダヤ人の王」が生まれたというのに、異邦人の彼らが拝みに来たのでしょうか。「東の方」というのは「ユダヤから見て東の方」ということで、かつてバビロンやペルシャがあった地域です。「新共同訳」は彼らを「占星術の学者達」と訳しています。彼らは天文学の先生であり、星占いの先生であり、呪い師であり、祭司でもあり…そういう人達だったと思われます。バビロンは、イエス誕生の 600 年前、ユダ国の主だった人々が捕囚民として連れて行かれた地です。バビロンでユダヤ人は惨めな捕囚民でしたが、彼らの信仰はバビロンの人々(後のペルシャの人々)にも影響を与えて行ったと思われます。「旧約ダニエル書」に、ダニエルの知恵に驚いたバビロンの王様がダニエルを「バビロンのすべての知者たちをつかさどる長官」(ダニエル 2:48)にした、という記事があります。今でいえば文科大臣にしたということです。ダニエルの信仰はバビロンの人々に影響を与えて行ったはずです。聖書が預言する救い主は、ユダヤ人だけではない、「世界の人々に救いを与える救い主」でした。「そのような救い主がやがて現れる」という希望は、東方の人々の心も捕らえて行ったのだと思います。

この博士達は占いをしていた人です。多くの人が救いを求めて訪ねて来たでしょう。でも、彼らの占いには、何の救いも、確かな希望もない、ということを誰よりも知っていたのが彼らだったのではないでしょうか。小島誠志という牧師の話です。教会に 1 人の女性が訪ねて来てポツリと言いました。「取り返しのつかないことをしました」。先生は「取り返しのつかないこと」の内容を聞いて何か助言して上げようとしました。しかし女性は立ち去ってしまうのです。先生は言っています。「あの日、彼女は、何者かの前に立ちたかったのです…彼女の深みに共にいる方をなぜ示すことができなかったのか…どんな人間の絶望よりもさらに深い神の恩寵の光の中に共に立って、なぜ祈れなかったのか、と思います」。神に祈る世界がなければ、真の光は

見えないのです。博士達も、人の世の闇を見ながら、そこに光をもたらすことが出来ないことを痛感していたから、「ユダヤに生まれる」と言われる「救い主」に望みを掛けたのではないでしょうか。あるいは、ある神父さんは「なぜ神父になったのか。本当に人を救うことの出来る本物に繋がり、その本物にひれ伏したかった」と言いました。博士達も、本当に自分を救ってくれる方の前にひれ伏すことを求めたのではないでしょうか。星の動きに異変が起こった時、彼らには、それが「神が特別なことを告げるしるしだ」ということが分かったのです。「救い主の誕生」と星との関連は、「旧約」にも「ヤコブから一つの星が上り…」(民数記 24:17)と預言されています。だから、ついに世界に救いを与える人物が生まれることを確信して、「救い主」を訪ねてユダヤにやって来たのです。

彼らはヘロデに教えられた通りベツレヘムに行きます。9～10 節「すると、見よ、東方で見た星が彼らを先導し、ついに幼子のおられる所まで進んで行き、その上にとどまった。その星を見て、彼らはこの上もなく喜んだ」(2:9～10)。ついに星が止まったのです。ついに救い主にまみえるのです。彼らは「この上もなく喜」(10)びました。そして「ひれ伏して拝んだ。そして、宝の箱をあけて、黄金、乳香、没薬を贈り物としてささげた」(11)のです。「黄金は王への捧げもの、乳香は祭司への捧げもの、没薬は死者への捧げもの」と言われます。それは真の王であり、人と神を執り成す祭司であり、死ぬことによって救いを成し遂げるイエス様の生涯を表す贈り物でした。博士達は、イエス様がそういう救い主であることを何か理解していたのかも知れません。しかしそれ以上に「宝の箱」というのは、楽器のケースのようなものです。旅に出て行く時や仕事に行く時には、持って行くのです。それには、彼らにとって大切な宝物が入っていました。それは星占い師の商売道具です。例えば、お呪いを書く時に没薬を入れたインクを使って書いたと言われます。それをイエスに捧げてしまったということは―(神は占いや呪いを嫌われることを彼らは知っていた。しかし捨てられなかった。でも彼らは)―救い主にまみえることが出来た、その喜びの中で、喜びを打ち消すようなもの、神の御心にそぐわないものを捨ててしまいました。彼らは「呪いをしてくれ」と頼まれても、もうしない、別の生き方をして行くのです。それは 12 節「別の道から自分の国へ帰って行った」の言葉にも暗示されています。彼らは神に近づく別の生き方、新しい生き方を始めるのです。

2. 「博士達の来訪」のメッセージ

この物語は私達に何を語るのでしょうか。2 つのことを申し上げます。

1) 神の選びの恵み

「マタイ福音書」では、異邦人で、しかも占い師であった彼らが最初にイエス様に礼拝を捧げるのです。そのことは「神の選びの不思議」を語るのではないでしょうか。彼らが星の運行に詳しかったこと、救いを求めていた、ということを申し上げました。しかしそんな人達は沢山いたでしょう。しかし彼らだけが、神の招きに応えて、立ち上がってやって来たのです。なぜ彼らはそうしたのか。それは最終的には、神の選びによることだったと思います。神に選ばれたから応答したのです。しかし、ではなぜ、神は彼らを選ばれたのでしょうか。聖書にこ

うあります。「あなたがたの召しのことを考えてごらんなさい。この世の知者は多くはなく、権力者も多くはなく、身分の高い者も多くはありません。しかし神は、知恵ある者をはずかしめるために、この世の愚かな者を選び、強い者をはずかしめるために、この世の弱い者を選ばれたのです。また、この世の取るに足りない者や見下されている者を、神は選ばれました。すなわち、有るものをない者のようにするため、無に等しいものを選ばれたのです。これは、神の御前でだれをも誇らせないためです」(1 コリント 1:26～29)。なぜ、彼らを選ばれたのか。それは、彼らが神の民ではない、異邦人であり、しかも占い師だったからだと思うのです。ユダヤ人にとって異邦人は神の救いから漏れるべき人々でした。しかも「占い」は、神が嫌われることです。彼らは神に選ばれるに相応しい人達ではなかった、御前に誇るべきものは何１つ持っていなかった、しかしだからこそ選ばれたのではないでしょうか。だからこそ、イエスにお会いしたとき、そんな自分達に神は目を留めて下さり、今救い主にまみえる、それを思って喜びに溢れたのではないでしょうか。

そのことは私達も同じです。お１人びとり、教会にお出でになる切っ掛け、理由はあられるでしょう。それは自分で決めたことのように思っても、決してそれだけではないのです。最後は神の選びです。あなたは神に選ばれなさったから、神の招きに応答してイエス様の前に出ておられるのです。もし皆様が「私は選ばれるような者ではない」と思われるなら、だからこそ神は選ばれたのです。大塚久雄という経済学者が、自分は何を支えに生きて来たか、講演の中でこう言いました。「『自分は無きに等しい者であって、その自分を神は選んで下さった』、そのことを支えにやって来た」。「私が神様を選んだのではない。神様が私を選ばれたのだ」という事実は、私達の歩みを支えるのです。イエスは、ある時、こう言われました。「まして神は、夜昼神を呼び求めている選民のために…いつまでも…放っておかれることがあるでしょうか」(7)。「選ばれた民のために神が何かをして下さる」という言葉です。祈るということは、神によって選ばれているという事実があるから可能になるのです。選ばれた者の祈りだから、神は聞いて下さる、それが私達の祈りの根拠です。ある牧師が言いました。「私達がたとえどんな困難な所に立っているにしても、祈ることが出来る限り、道は必ず前に開けるのです」。いずれにしても、選ばれた、という事実を感謝し、大切にして行きましょう。

2）選ばれた者ゆえの求道

「マタイ福音書」で最初に主イエスを心から礼拝したのは異邦人でした。その事実は、ユダヤ人クリスチャンには受け入れ難いことでした。彼らは「『ユダヤ人』だけが『真の神の民クリスチャン』になれる」と思っていたのです。しかし「ユダヤ人だけが神の民である」という考えは、実は神の御心から遠い考え方だったのです。彼らは自分達の信仰、生き方を、御心に適うように変えて行く必要があったのです。本当の意味で神の御心に近づく必要があった。そこに祝福の秘訣があったのです。つまりイエス様を信じて終わりではない、信じてからこそ真の求道があるのです。

ある神学者が言いました。「クリスマスに神の前に立てば立つほど、私達の心の神から遠いこと、私達の行っている業の神…からの遠さを痛烈に味わわずにはおられない」。そうであれば、

この物語は私達のための物語でもあるのではないでしょうか。一昨年の「信徒大会」に来て下さった横山幹雄先生は、高齢になった今「『あなたは年を重ね、老人になったが、まだ占領すべき地がたくさん残っている』(ヨシュア 13:1)という御言葉を聞いている」と、「主を知ること、主に似ること、主を伝えること、3 つの占領すべき地を神様に示されている」と言われました。私達の占領すべき地、求道の道はどのようなものでしょうか。

カナダの教会で副牧師として奉仕して下さったのは、趙先生という韓国人の先生でした。先生は韓国陸軍を退官された後、教会の長老として奉仕しておられましたが、ある学会で日本語の通訳をされました。(先生は戦前、戦中に日本語の教育を受けておられましたから日本語が出来たのです)。学会の指導者が「これからは、神様があなたを、日本語を用いて神に仕えるようにされるだろう」と言ったそうです。先生は「遠からずこの世を去る時を考えると、日本人を憎み、彼らが悪くなるように願う心持ちでいては、決して天国には入れないだろう。日本人を愛せるようにならなくては…」、そうやって日本で開拓伝道をし、後に私達の日系人教会に仕えて下さったのです。それが先生の求道だったのです。奥様は日本での開拓伝道を振り返ってこう言っておられます。「人の能力では不可能でも、神様と共になら不可能なことはないということを再確認しました」。であれば、私達もこの 1 年をますます神様に近づき、神の不思議を経験する 1 年にしたいと願います。大きなことを考える必要はない、地道なことこそ大切だと思います。「今年こそは聖書を通読する、もっと祈りの時間を取る」、そのような目標も大切な求道ではないでしょうか。聖書は約束します。「神に近づきなさい。そうすれば、神はあなたがたに近づいてくださいます」(ヤコブ 4:8)。今年 1 年、良い求道の旅をしたいと願います。祝福を求めましょう。